

200924029B

厚生労働科学研究費補助金

第3次対がん総合戦略研究事業

「QOLの向上をめざしたがん治療法の開発研究」  
に関する研究

平成19～21年度 総合研究報告書

研究代表者 江角 浩安  
平成22(2010)年 4月

## 目 次

### I. 総合研究報告

QOLの向上をめざしたがん治療法の開発研究 .....	3
-----------------------------	---

江角浩安  
林 隆一  
井本 滋  
名川 弘一  
齋藤 典男  
内田 淳正  
中塚 貴志  
佐々木 寛  
萩原 明郎  
荒井 保明  
土岐 祐一郎  
古瀬 純司  
池田 公史  
武藤 学

III. 研究成果の刊行に関する一覧表 .....	23
---------------------------	----

# I . 総合研究報告書

QOL の向上をめざしたがん治療法の開発研究

研究代表者 江 角 浩 安 独立行政法人 国立がん研究センター東病院長

**研究要旨**

今期3年間の主な研究成果は以下の通りである。①QOLの損失を最小限にする治療法の開発では、下咽頭がんの初期病変の概念を確立し切除1次縫合法、内視鏡治療法の確立、骨盤内臓全摘の回避のための術式の有効性と安全性の種名、下肢リンパ浮腫予防のためのリンパ管静脈吻合の有効性と安全性の証明、PDTと温熱療法による原発性及び転移性四肢腫瘍の治療法の開発②失われた機能の回復では下顎骨欠損の再建法の改良、グレリンによる体重減少・食思不振の予防法の開発、IVRによる緩和療法の有効性と安全性の証明、再生医療の可能性を示す事が出来た。③新しい薬物療法では、腹膜播種を伴う胃がんの新しい薬物療法の開発、低毒性の新しい原理に基づく薬物療法の前臨床試験の終了。これらにより、今後新しい方法の臨床試験による証明と普及への素地が出来た。

**研究分担者氏名及び所属施設**

江角浩安	国立がん研究センター東病院
林 隆一	国立がん研究センター東病院
井本 滋	国立がん研究センター東病院
名川弘一	東京大学大学院医学系研究科
斉藤典男	国立がん研究センター東病院
内田淳正	三重大学医学部
中塚貴志*	埼玉医科大学
佐々木寛	東京慈恵会医科大学
萩原明郎	同志社大学
荒井保明	国立がん研究センター中央病院
土岐祐一郎	大阪大学大学院医学系研究科
古瀬純司**	杏林大学医学部付属病院
池田公史***	国立がん研究センター東病院
武藤学	京都大学大学院医学研究科

\*：平成 19 年度

\*\*：平成 19 年～20 年度

\*\*\*：平成 20 年度

**A. 研究目的**

本研究プロジェクトは、厚生労働省第3次対がん十カ年戦略分野6の中で、医療経済、精神腫瘍、コミュニケーション患者支援に関わることを以外の領域で、QOLを重視した治療法を開発を探索的におこない、この研究班の中で生み出された基盤的な技術が、臨床の中で比較試験として臨床試験を行える様に臨床導入の最初の部分を行う事を目的とした。より具体的には、1) 切除可能例に対して根治性を犠牲にせず機能温存、臓器温存を可能とする治療法の開発、2) がんの治療あるいは浸潤に伴って損なわれる様々なQOLを向上するための治療法の開発、3) 難治のがんに対する低毒性の薬物療法を開発を目標としている。

は浸潤に伴って損なわれる様々なQOLを向上するための治療法を開発、3) 難治のがんに対する低毒性の薬物療法を開発を目標としている。本研究はこの様ながん患者の身体的 QOL の障害を最小限にとどめるための様々な治療法を開発することで、がん患者の社会的復帰や日常生活の質の向上に寄与することを目的としている。

**B. 研究方法**

研究の方向性は基本的には1) 根治性を犠牲にせず機能温存、臓器温存を可能とする治療法の開発、2) がんの治療あるいは進展に伴って損なわれるQOLの向上のための治療法を開発、3) 難治がんに対する低毒性の薬物療法を開発を目標としている。

これらは、いずれも日常診療の中での問題意識や創意工夫を基盤として発想されるいわゆる臨床研究の範疇であり、基本的には薬剤開発に準拠して、第I相試験に相当する feasibility 試験から、第II相試験に相当する有効性と安全性の検証試験、更には第III相試験に相当する生命予後を検証する比較試験へと相別に評価が求められる。但し、第III相の部分については、当班のみでは人的資源も限られることから、他の研究グループとの共同研究を行うこととしている。

(倫理面への配慮)

本研究では多くの開発的研究成果の臨床導入が図られる。係る場合は、各施設における倫理審査委員会の承認を得ると共に、従来の標準的治療法との利点欠点、他の治療選の可能性、当該治療法を選択しなかった場合の不利益のないこと等を明

記した文書による同意を取得する。また、重篤な有害事象あるいは予想外の有害事象をみた場合は、直ちに当該施設長および各プロトコールに定める効果安全性評価委員会に報告し、研究続行の可否を決定する。また、遺伝子解析を含む研究に関しては、大阪大学、国立がんセンター倫理審査委員会に研究プロトコールの審査を受けた上で実施した。動物実験に関しては各施設の動物実験に関する倫理審査委員会の承認を得た上でおこなった。

## C. 研究成果

### 1. 身体的 QOL の障害を最小化したがん治療法の開発

#### 1) 機能温存・臓器温存療法の開発

##### ①下咽頭がんに対する切除・一次縫合の有用性に関する解析

2007年までに行った下咽頭部分切除1次縫合症例39例について解析を行った。観察期間は中央値39.7ヶ月で38例が生存(1例は他因死)局所制御率は82%と良好な結果であった。一次縫合可能な範囲は、梨状陥凹がん:1側の梨状陥凹+披裂喉頭蓋ヒダ+喉頭蓋の患側基部、輪状後部がん:輪状後部から1側の梨状陥凹内側、後壁がん:粘膜欠損が2~3cm径で後壁に欠損が限局、以上のような場合と考えられた。一方、NBIの導入により表在癌に関しては内視鏡治療も行われるようになった。その適応を検討するため、下咽頭表在がんにおけるリンパ節転移の解析をした。リンパ節転移を認めたもっとも薄い症例は隆起型:4000 $\mu$ m、潰瘍型:1500 $\mu$ mで表在型の症例にはリンパ節転移を認めなかった。脈管侵襲陽性症例40例中26例(65%)に転移を認めたが、脈管侵襲がない症例では24例中7例(29%)にリンパ節転移を認めたのみであった。すなわち、下咽頭表在がんに対して内視鏡治療を行い、その腫瘍の厚みが1500 $\mu$ m以上ないしは脈管侵襲陽性である症例は頸部転移の危険性が高いことから、嚴重な経過観察が必要と考えられた。

##### ②骨盤機能温存手術の開発

術前・術中の所見で前立腺、または精囊および前立腺に癌浸潤ありと判断された25例の下部直腸進行癌症例に対し、精囊・前立腺全摘とリンパ節郭清を伴う直腸切除(肛門括約筋温存)または直腸切断の同時手術を施行した。標準治療ではTPEの適応であった。周術期合併症として縫合不全、感染、出血などを認めたが重篤なものはなく、手術関連死亡例は認められなかった。全例で温存し

た膀胱には癌浸潤を認めず、また全症例でcancer-freeのsurgical marginsが得られた。25例中20例には尿道括約筋の温存が可能で、5例は癌浸潤疑いで尿道括約筋切除した。20症例に残存膀胱・尿道吻合が行われ、5例にはカテーテルを使用する膀胱瘻を造設した。この5例は、標準治療では回腸導管造設になる症例である。25例中16例に肛門括約筋部分温存による結腸・肛門または肛門管吻合が行われ、9例は直腸切断による永久Stomaとなった。従ってStoma-less:16例、Single stoma:4例、膀胱瘻とStoma:5例となった。膀胱・尿道吻合例では、全例で腹圧排尿による自己排尿が可能であった。膀胱コンプライアンスは低下していた。膀胱瘻例ではカテーテルが必要だが、管理は比較的容易であった。肛門括約筋部分温存術では自己排便が可能であり、全くの失禁例を認めなかった。術後の平均観察期間は40ヶ月で、局所再発2例、5年生存率は83%を示している。一方、同期間中に上部尿路系浸潤大腸癌の尿路再建33例に実施した。再建法は尿管欠損長により変更し、尿管尿管吻合:4例、一側尿管膀胱吻合:13例、両側尿管膀胱吻合:5例、Psoas muscle法:7例、Boari flap:2例、尿管・小腸・膀胱吻合:2例、であった。全例に腎機能は保持されたが、高度排尿障害を3例に認めた。

##### ③NO乳がんに対する局所治療の開発

ラジオ波焼灼治療の第I相試験の結果は、病理学的完全腫瘍焼灼率は87%(30例中26例)であり、初期の手技的な焼灼の失敗例を除いた場合の病理学的完全腫瘍焼灼率は93%(28例中26例)であった。第II相試験は8例が登録され、皮膚熱傷等の重篤な合併症は認めず、焼灼後1ヵ月から11ヵ月の経過観察時点で乳房内再発を認めなかった。

##### ④患肢温存手術の展開

アクリジンオレンジ(AO)を用いた光線および放射線力学的療法による低侵襲手術:アクリジンオレンジ治療法(AOT)を開発し、四肢体幹に発生した悪性骨軟部腫瘍55例に応用したところ、腫瘍サイズ10cm以下の場合、生存率74.4%、局所制御率は89.5%と、良好な成績が得られた。さらに我々は、四肢長管骨の転移性骨腫瘍に対する、低侵襲で確実な外科的治療法として、体外交流電磁場発生装置を用いた磁性体温熱療法を開発し、現在まで、18例(男8、女10)20肢を対象に治療を行ったところ、全例、疼痛および患肢機能の改善が得られ、X線上8肢で明らかな溶骨性変化の縮

小または骨形成を認めた。

アクリジンオレンジ治療法および磁性体温熱療法はそれぞれ、悪性骨軟部腫瘍、転移性骨腫瘍に対して有効で安全な低侵襲治療法である。

#### ⑤術後のリンパ浮腫を防止する子宮頸がん手術法の開発

子宮体癌術後の下肢リンパ浮腫の予防効果については、リンパ管・細静脈の吻合が完遂できた症例 13 例中に一過性かつ Grade I の下肢リンパ浮腫を認めたのみで長期にわたって予防効果が認められた。また、子宮体癌・頸癌のリンパ節郭清症例に対して後腹膜閉鎖 VS 開放の無作為化試験は目標症例 180 例の登録が予定より早く終了した。経過観察中である。

#### 2) 障害された QOL の回復をめざす各種治療法の開発

##### ①形態・機能再建法の開発

頭頸部腫瘍切除に伴う下顎区域切除後の再建において、下顎骨再建用プレートは古くから用いられてきた選択肢の一つである。しかし、人工物・異物であるがゆえに、チタン製のプレートであっても術後感染や露出などの合併症の頻度は決して低いものではなかった。そこで下顎再建プレートに伴う術後合併症を軽減する目的で腹直筋皮弁の筋膜を利用した新しい再建方法を考案し、臨床例を重ねた。術後の血栓形成などによる血管再吻合例や壊死例はなく、全例で皮弁は生着した。術後合併症は、1 例で皮弁に付加した筋膜で被覆できなかったプレート断端部分に感染を生じ、小範囲であるが治癒が望めずプレート抜去を余儀なくされた。しかし、他の 10 例では、術後観察期間が平均 25.7 ヶ月 (3 月から 9 年 4 ヶ月) になるが、プレートへの感染や露出などの合併症は生じていない。また、皮弁採取部にもヘルニアなどの合併症は認めていない。良い方法であると考えられた。

患者の QOL を著しく下げる食道癌治療に関連する狭窄に対し積極的に取り組んできた。食道狭窄に対しては、一般的に内視鏡的バルーン拡張術が広く行われているが穿孔率も高い。その原因として、適切な拡張バルーンのサイズ選択や狭窄部にかかる圧に関しては十分な理解がされていないことが挙げられる。本研究では、人工狭窄モデルを

作成し、狭窄部にかかる hoop 圧を反発力として測定した。同じ径の狭窄部に対し、同じ拡張圧で拡張すると、サイズの大きなバルーンほど狭窄部での hoop 圧は大きくなった。異なる径の狭窄部に対し、同一径のバルーンを用いた場合、拡張圧ごとの狭窄部での hoop 圧は変わらなかった。本研究によって、狭窄の程度とマルチ径バルーンのサイズによる拡張圧が科学的に示された。また、難治性食道狭窄に対する有効な治療法はこれまでになく、食事がとれないばかりか精神的な苦痛も患者に与える。われわれは、このような難治性食道狭窄に対し、新しい狭窄解除術：放射状切開剥離術 (Radial Incision and Cutting method: RIC 法) を開発し、長期間 (中央値 6 ヶ月) にわたる内視鏡的バルーン拡張術でも効果の認められない計 29 例の難治性食道狭窄に対し RIC 法を行った。55% (16/29) の症例で拡張術が不要になり、全例で食事内容の改善と食事時間の短縮が認められた。出血や穿孔などの有害事象は発生しなかった。RIC 法は、これまで難治性の嚥下障害によって苦しんでいた患者に対する全く新しい画期的な治療法として期待できる。

##### ②再生医学の臨床応用

イヌを用い、ヒト羊膜と口腔粘膜の癒痕形成防止効果を利用し長期に癒痕狭窄を起ささない食道の再生に成功した。腹膜偽粘液腫などに対する広範囲腹膜切除手術は腸管癒着などの術後 QOL を悪化させる。動物実験で羊膜を用い、癒着を生じず腹膜の再生に成功した。しかしこれらの研究に用いた羊膜は実際に使用しようとする生体材料であるために様々な制限が加わり臨床応用はかなり難しい事が分かった。乳癌や子宮癌ではリンパ節徹底郭清が原因でリンパ液還流が損なわれ上肢や下肢のリンパ浮腫を生じ、患肢機能障害により QOL が低下する。この病態に対し VEGF-C によるリンパ管再生治療にラットを用いて成功した。これらの再生医療を用いた研究は、食道がん、腹膜悪性偽粘液種、子宮がんや乳がんの手術において術後 QOL を改善することが可能になると考えられる。

##### ③IVR による症状緩和

がん患者の QOL 向上に寄与する可能性をもつ 8 つの緩和 IVR について、第 I/II 相試験あるいは第

II 相試験を多施設共同研究として行った。対象緩和 IVR としては、①経頸静脈経肝的腹腔—静脈シャント造設術、②経皮的椎体形成術、③有痛性骨盤内腫瘍に対するラジオ波凝固療法第 I/II 相試験、④がんによる消化管通過障害に対する経皮経食道胃管挿入術、⑤切除不能悪性大腸狭窄に対するステント治療、⑥有痛性骨腫瘍に対するラジオ波凝固療法第 I/II 相試験、⑦悪性腫瘍による大静脈症候群に対するステント治療、⑧有痛性骨腫瘍に対する経皮的セメント注入術第 II 相試験である。悪性難治性腹水、有痛性骨転移、上部消化管狭窄、切除不能悪性大腸狭窄、大静脈症候群に対する緩和 IVR 治療の試験が終了し、そのいずれにおいても、許容可能な安全性と標準的治療となることを期待し得る臨床的有効性が確認された。この結果に基づき、これら 5 つの緩和 IVR 治療について、既存治療に対する優越性を評価するためのランダム化比較試験を立案。十分な検討を経て試験計画書を作成し、試験を開始した。

④胃全摘術後の体重減少に対するグレリン投与の有効性の検証

胃全摘術後は体重減少が著明である。この原因として胃より分泌される食欲増進ホルモン・グレリンの減少の関与を想定し、グレリン投与により体重減少が予防できるか否かを検討した。プラセボを用いたランダム化臨床試験を行いグレリン投与群で有意に食欲増進、食事量増加、体重減少予防が得られることを確認した。

### 3) 新しい薬物療法の開発

①固形がんに対する低毒性治療薬の開発と臨床導入

がん組織の特異的代謝、生物反応に着目し、がん組織に特異性が高く正常組織に対しては低毒性の治療薬を開発することを目的とする。長期的には新しい薬剤の開発も進めるが、すでに従来の研究で見いだしている、アクチゲニン、キガマイシンなどの臨床導入を目指す。本年は、アクチゲニンを比較的多く含む薬事登録されている牛蒡子の粗抽出物が、アクチゲニン含量に比例してヌードマウスのゼノグラフトに対する抗腫瘍性を示すこと、さらに臨床導入する場合に併用薬として想定されるゲムシタピンと併用する事に依る毒性の増強のない事、抗腫瘍性は増強する事、初歩的なヒトでの薬力学的解析で血中にゲムシタピン及びゲムシタピンのグルクロン酸抱合体が十分な濃度で検出される事を確認した。臨床試験準備中である。

②腹膜播種を伴う胃癌症例を対象とした新し

い治療法の開発

S-1+Paclitaxel 経静脈・腹腔内併用療法を開発した。第 I 相試験により好中球減少を用量制限毒性として、腹腔内投与の推奨投与量を  $20\text{mg}/\text{m}^2$  に決定した。第 II 相試験では、1 年全生存率 78%、生存期間中央値(MST)23.5 ヶ月であり、腹水減少を 62%、腹水細胞診陰性化を 86%に認めた。主な有害事象 (Grade3/4) は好中球減少(38%)、悪心嘔吐(8%)であった。更に、併用化学療法が奏効し、播種が消失または縮小した症例 32 例に胃切除を施行した。重篤な合併症はなく、無再発生存期間中央値 20.1 ヶ月、MST 34.5 ヶ月であった。本併用化学療法および胃切除による集学的治療の安全性および有効性が確認された。

腹水を有する膵癌患者に対するゲムシタピン(GEM)の有効性および安全性を検討した。対象は一次化学療法として GEM が投与された腹水を有する膵癌患者 80 例である。腹水量は少量、中等量、大量に分類し、腹水の改善効果、生存期間および予後因子を検討した。抗腫瘍効果は CR 0 例、PR 3 例、SD 35 例、PD 42 例であり、奏効割合は 3.7% (95% C.I. 0.8-10.6%) であった。腹水の消失・改善を 14 例(17.5%)で認めた。Grade 3 以上の主な有害事象は白血球減少 15 例 (18.8%)、食欲不振 15 例 (18.8%)、貧血 15 例 (18.8%)、好中球減少 12 例 (15.0%)、悪心 8 例 (10.0%) であった。生存期間中央値、1 年生存割合、治療成功期間中央値はそれぞれ 4.2 ヶ月、16.5%、1.6 ヶ月であった。多変量解析の結果、腹水量大量、CA19-9>1000U/mL、肝転移あり、ECOG PS 2 が独立した予後不良因子であった。腹水を有する膵癌患者に対する GEM による治療は十分とはいえず、更なる治療効果を期待して、ゲムシタピンと S-1 の併用療法を計画し、多施設共同での第 II 相試験を開始した。

### D. 考察

本研究班はがん患者の身体的 QOL の向上を目的とした各種の根治的、あるいは姑息的治療法を開発を行おうとするものであるが、QOL 向上は全てのがん患者の希求するところであり、可及的に速やかな普及が求められる。しかし、広く普及を図るには開発した治療法技術の妥当性、再現性、安全性、有効性などを検証する臨床試験が不可欠である。

この 3 年間で開発した新しい技術では、下咽頭がんの切除・1 次縫合や表在癌の内視鏡治療など

が今後より大きなスケールと長期間の臨床試験により安全性と有効性を確立される必要がある。

直腸癌の肛門温存に関しては多くの中核的施設では徐々に広まってきているが、尿路浸潤を伴う直腸癌のTPEの回避を目指した手術法に関しては、術前の適応の決定も含め残された課題が多い。

リンパ浮腫を予防する子宮頸部がん体がんの術式に関しては症例の登録は終了し追跡と結果の解析が残っている。リンパ管の静脈への吻合は術者の技量により大きく結果が変わる可能性が高く広く一般化できる技術とするための改良が必要である。

食道狭窄に対するRIC法の開発は今後中期にわたる有効性と安全性の検証が必要である。頭頸部食道領域は同時性・異時性の多発癌の問題をどの様にコントロールするのかが問題がある。昨年度から始まった共同研究としてIPCLの発生に関わる遺伝子発現解析による予防法の研究はその意味では今後大きな可能性を秘めており、より早い段階での予防・治療法こそが最大のQOLの保持に役立つ。

なお、本研究班で新しく始まった、グレリンの投与による体重減少・食欲不振の改善法は大きな可能性をはらんでいるが、今後の臨床試験の中でその適応範囲や有効性の証明が課題であり、グレリンの無効な例に対するさらに新しい対処法の開発も望まれる。

薬物療法に関しては今後大いに期待できるが臨床試験の結果を待ちたい。

再生医療の臨床応用に関しては、本研究班で用いたごとく他の動物腫のものを用いたので臨床導入に当たっての困難がある。iPS細胞などを利用した研究が今後実際にヒトへも応用可能となる日も近いと思われ、注目する必要がある。

## E. 結論

機能温存手術や臓器温存療法はがん患者の身体的QOLの向上に寄与し得るが、手技の安定化(標準化)と根治性の評価が課題である。また、外科手術や病勢の進行によって招来される患者QOLの障害についても、これを軽減する様々な支持療法の開発が可能である。この場合、生存をendpointとしていないことから第Ⅱ相比較試験でも有効性評価が可能である。その意味で、臨床試験の合理的な設定が課題となるが、QOLの指標尺度をどの様に設定するかを今後は検討する必要がある。

## F. 健康危険情報

今期の研究期間中に健康危険情報は入手されなかった。

## G. 研究発表

### 1. 論文発表

江角

1. Momose I, Ohba S, Esumi H, et al. Mitochondrial inhibitors show preferential cytotoxicity to human pancreatic cancer PANC-1 cells under glucose-deprived conditions. *Biochem Biophys Res Commun.* 392(3):460-6.2010.
2. Nishio T, Miyatake A, Esumi H, et al. The development and clinical use of a beam on-line pet system mounted on a rotating gantry port in proton therapy. *Int. J. Radiation Oncology Biol. Phys.* 76(1):277-86.2010.
3. Tatemichi M, Ogura T, Esumi H. Impact of inducible nitric oxide synthase gene on tumor progression. *Eur J Cancer Prev.* 18(1):1-8.2009.
4. Tsuchihara K, Fujii S, Esumi H. Autophagy and cancer: Dynamism of the metabolism of tumor cells and tissues. *Cancer Lett.* 278(2):130-8.2009.
5. Tsuchihara K, Suzuki Y, Esumi H, et al. Massive transcriptional start site analysis of human genes in hypoxia cells. *Nucleic Acids Res.* 37(7)2249-63.2009.
6. **Ichinoseki-Sekine N, Naito H, Tsuchihara K, Esumi H, et al.** Provision of a voluntary exercise environment enhances running activity and prevents obesity in Snark-deficient mice. *Am J Physiol Endocrinol Metab.* 296(5):1013-21.2009.
7. Hirayama A, Kami K, Sugimoto M, Esumi H, et al. Quantitative metabolome profiling of colon and stomach cancer microenvironment by capillary electrophoresis Time-of-Flight mass spectrometry. *Cancer Res.* 69(11):4918-25.2009.
8. Sugiyama K, Yamaguchi M, Kuroda J, Esumi H, et al. Improvement of radiation-induced healing delay by etanercept treatment in rat arteries. *Cancer Sci.* 100(8):1550-5. 2009.
9. Tomitsuka E, Kita K, Esumi H. Regulation of succinate-ubiquinone reductase and fumarate reductase activities in human complex II by phosphorylation of its flavoprotein subunit. *Proc Jpn Acad Ser B Phys Biol Sci.* 85(7):258-65.2009.
10. Li F, Awale S, Esumi H, et al. Chemical constituents of propolis from myanmar and their



- preferential cytotoxicity against a human pancreatic cancer cell line. *J Nat Prod.* 72(7):1283-7.2009.
11. Awale S, Miyamoto T, Esumi H, et al. Cytotoxic constituents of soyimida febrifuga from myanmar. *J Nat Prod.* 72(9):1631-6.2009.
  12. Sugiyama K, Ishii G, Ochiai A, Esumi H. Improvement of the breaking strength of wound by combined treatment with recombinant human G-CSF, recombinant human M-CSF, and a TGF-beta1 receptor kinase inhibitor in rat skin. *Cancer Science.* 99(5):1021-8.2008.
  13. Tsuchihara K, Ogura T, Esumi H, et al. Susceptibility of Snark-deficient mice to azoxymethane-induced colorectal tumorigenesis and the formation of aberrant crypt foci Author(s). *Cancer Science.* 99(4):677-82.2008.
  14. Nakamura M, Esumi H, Jin L, et al. Induction of necrosis in human myeloma cells by kigamisin. *Anticancer Res.* 28(1A):37-43.2008.
  15. Win NN, Awale S, Esumi H, et al. Novel anticancer agents, kayeassamins A and B from the flower of *Kayea assamica* of Myanmar. *Bioorg Med Chem Lett.* 18(16): 4688-91.2008.
  16. Awale S, Li F, Onozuka H, Esumi H, et al. Constituents of Brazilian red propolis and their preferential cytotoxic activity against human pancreatic PANC-1 cancer cell line in nutrient deprived condition. *Bioorganic & Medicinal Chemistry.* 16(1): 181-9.2008.
  17. Win NN, Awale S, Esumi H, et al. Novel anticancer agents, kayeassamins C-I from the flower of *Kayea assamica* of Myanmar. *Bioorg Med Chem.* 16(18): 8653-60.2008.
  18. Fujii S, Mitsunaga S, Esumi H, et al. Autophagy is activated in pancreatic cancer cells and correlates with poor patient outcome. *Cancer Sci.* 99(9):1813-9.2008.
  19. Win NN, Awale S, Esumi H, et al. Panduratin D-I, novel secondary metabolites from rhizomes of *Boesenbergia pandurata*. *Chem Pharm Bull (Tokyo).* 56(4):491-6.2008.
  20. Kuga W, Tsuchihara K, Esumi H, et al. Nuclear localization of SNARK; its impact on gene expression. *Biochem Biophys Res Commun.* 377(4):1062-6.2008.
  21. Minegishi Y, Tsukino H, Esumi H, et al. Susceptibility to lung cancer and genetic polymorphisms in the alcohol metabolite-related enzymes alcohol dehydrogenase 3, aldehyde dehydrogenase 2, and cytochrome P450 2E1 in the Japanese population. *Cancer* 110(2):353-62.2007.
  22. Win NN, Awale S, Esumi H, et al. Bioactive Secondary Metabolites from *Boesenbergia pandurata* of Myanmar and Their Preferential Cytotoxicity against Human Pancreatic Cancer PANC-1 Cell Line in Nutrient-Deprived Medium. *J Nat Prod.* 70(10):1582-7.2007.
  23. Sato K, Tsuchihara K, Esumi H, et al. Autophagy is activated in colorectal cancer cells and contributes to the tolerance to nutrient deprivation. *Cancer Res.* 67(20):9677-84.2007.
  24. Idate Murakami Y, Yatabe Y, Esumi H, et al. c-Maf expression in angioimmunoblastic T-cell lymphoma. *Am J Surg Pathol* 31(11):1695-702.2007.
  25. 江角浩安: 癌特異的治療法の開発: 栄養飢餓耐性を標的として, 羊土社実験医学 27(2):202-7.2009.
  26. 紙健次郎・富塚江利子・江角浩安・他: がんメタボロームによるエネルギー代謝の解析とがんの微小環境を標的とした治療薬の開発に向けて, 臨床化学 37(4):361-7.2008.
- 林
27. Yasumura T, Hayashi R, et al. Functional Outcomes and Reevaluation of Esophageal Speech After Free Jejunal Transfer in Two Hundred Thirty-Six Cases. *Annals of Plastic Surgery.* 62(1): 54-58. 2009.
  28. Tomidokoro Y, Hayashi R, et al. Simultaneous squamous cell carcinoma with leiomyosarcoma of the larynx. *Auris Nasus Larynx.* 36(2): 239-43. 2009.
  29. Ando M, Hayashi R, et al. Metastatic Neck Disease Beyond the Limits of a Neck Dissection: Attention to the 'Para-hyoid' Area in T1/2 Oral Tongue Cancer. *Jpn J Clin Oncol.* 39(4): 231-6. 2009.
  30. Kadota H, Hayashi R, et al. Analysis of thrombosis on postoperative day 5 or later after microvascular reconstruction for head and neck cancers. *Head and Neck.* 31(5): 635-41. 2009.
  31. Shirasu M, Hayashi R, et al. Dimethyl Trisulfide as a Characteristic Odor Associated with Fungating Cancer Wounds. *Biosci Biotechnol Biochem.* 73(9): 2117-20. 2009.
  32. Sakuraba M, Hayashi R, et al. A new flap design for tongue reconstruction after total or

- subtotal glossectomy in thin patients. *J Plast Reconstr Aesthet Surg.* 62(6) : 795-9. 2009.
33. Ugumori T, Hayashi R, et al. Prospective Study of Early Detection of Pharyngeal Superficial Carcinoma with the Narrowband Imaging Laryngoscope. *Head and Neck.* 31(2) : 189-94. 2008.
  34. Zhang S, Hayashi R, et al. Total Microvessel Perimeter per Tumor Area Is a Predictor of Radiosensitivity in Early-Stage Glottic Carcinoma. *Int J Radiat Oncol Biol Phys.* 73(4) : 1104-9. 2008.
  35. Sakuraba M, Hayashi R, et al. Three-dimensional reconstruction of supraglottic structures after partial pharyngolaryngectomy for hypopharyngeal cancer. *Jpn J Clin Oncol.* 38(6) : 408-13. 2008.
  36. Daiko H, Hayashi R, et al. Surgical Management of Carcinoma of the Cervical Esophagus. *Journal of Surgical Oncology.* 96: 166-72. 2007.
  37. Sarukawa S, Hayashi R, et al. Immediate maxillary reconstruction after malignant tumor extirpation. *Science Direct EJSO.* 33: 518-23. 2007.
  38. Kawashima M, Hayashi R, et al. Accelerated Radiotherapy and Larynx Preservation in Favorable-risk Patients with T2 or Worse Hypopharyngeal Cancer. *Jpn J Clin Oncol.* 37(5): 345-52. 2007.
  39. Kawashima M, Hayashi R, et al. Influence of Delayed Tumor Clearance on Reliability of Complete Response Rate in Chemoradiotherapy for Head and Neck Cancer. *Jpn J Clin Oncol.* 37(8): 559-67. 2007.
  40. Shinozaki T, Hayashi R, et al. Palliative total pharyngo - laryngo - esophagectomy. *Auris Nasus Larynx.* 34: 561-4. 2007.
  41. 林 隆一: 総論 8.頭頸部疾患 233.中咽頭癌(悪性リンパ腫を除く), 今日の耳鼻咽喉科頭頸部外科治療指針 第3版 2008: 456-8
  42. 林 隆一: B 手術療法とその看護 1.手術療法 5)喉頭の手術, がん看護 実践シリーズ 2 頭頸部がん眼科領域のがん 2007:99-102.
  43. 篠崎 剛, 林 隆一, 他: 下咽頭癌治療における化学放射線治療の役割, 頭頸部外科 19(1): 1-4. 2009.
  44. 海老原 充, 林 隆一: 高齢頭頸部がんの治療, 腫瘍内科 3(5): 541-5.2009.
  45. 林 隆一: 中・下咽頭表在癌の診断と治療—頭頸科の立場から—, 日本消化器病学会雑誌 106(9): 1287-90.2009.
  46. 櫻庭 実, 林 隆一, 他: 放射線下顎骨壊死に対する遊離組織移植による再建術, 日本頭蓋顎顔面外科学会誌 25(4): 305-10.2009.
  47. 朝蔭 孝宏, 林 隆一, 他: 舌癌 T2N0 症例の頸部リンパ節の取り扱いについて, 耳鼻と臨床 55(補 1): S45-S54.2009.
  48. 櫻庭 実, 林 隆一, 他: 特集マイクロサージャリーを用いた形成外科手術 穿通枝皮弁を用いた頭頸部の再建 *Head and Neck Reconstructuoin with a perforator flap, メディカル・サイエンス・ダイジェスト* 34(2) 増大号: 19-22.2008.
  49. 櫻庭 実, 林 隆一, 他: 遊離空腸移植における切除と再建の連携 —再建の立場から—, 頭頸部癌 34(3): 245-8.2008.
  50. 竹村 博一, 林 隆一, 他: 化学放射線療法施行後の遺残、再発症例に対する下咽頭喉頭全摘術の治療成績, 頭頸部癌 34(1): 47-51.2008.
  51. 大幸 宏幸, 林 隆一, 他: 頭頸部再建における切除と再建の連携 —切除の立場から—, 頭頸部癌 34(4): 465-8.2008.
  52. 林 隆一: 下歯肉癌 T3・T4 症例の手術治療, *JHONS* 23(4): 607-9.2007
  53. 林 隆一: 頭頸部癌に対する導入化学療法, *医学のあゆみ* 221(4): 261-3.2007.
  54. 林 隆一: 各論 4.頭頸部腫瘍術後の機能回復 1) 口腔がん術後の咀嚼、耳鼻咽喉科, 頭頸部外科 79(5)増刊: 173-6.2007.
  55. 櫻庭 実, 林 隆一, 他: 特集 上顎癌切除後の再建と形態の回復 チタンメッシュと遊離皮弁による眼窩底一次再建, 形成外科 50(8): 869-75.2007.
  56. 櫻庭 実, 林 隆一, 他: 下顎再建の方法 選択と問題点, 日本マイクロサージャリー学会誌 20(3): 287-92.2007.
  57. 林 隆一: PART2 がんにはどのようなものがあるか 頭頸部がん, からだの科学 253: 37-41.2007.
- 井本
58. Imoto S, Wada N, Sakemura N, et al. Feasibility study on radiofrequency ablation followed by partial mastectomy for stage I breast cancer patients. *The Breast* 18:130-4.2009.
  59. Hasebe T, Imoto S, Yokose T, et al. Histopathologic factors significantly associated with initial organ-specific metastasis by invasive ductal carcinoma of the breast: a prospective study. *Hum Pathol* 39:

- 681-93.2008.
60. Hasebe T, Yamauchi C, Imoto S, et al. Grading system for lymph vessel tumor emboli for prediction of the outcome of invasive ductal carcinoma of the breast. *Hum Pathol*. 39:427-36.2008.
61. Tanaka K, Imoto S, Wada N, et al. Invasive apocrine carcinoma of the breast: clinicopathologic features of 57 cases. *Breast J*. 14:164-8.2008.
62. Wada N, Imoto S: Clinical evidence of breast cancer micrometastases in the era of sentinel node biopsy. *Int J Clin Oncol*. 13(1):24-32.2008.
63. Kurosumi M, Takatsuka Y, Imoto S, et al. Histopathological assessment of anastrozole and tamoxifen as preoperative (neoadjuvant) treatment in postmenopausal Japanese women with hormone receptor-positive breast cancer in the PROACT trial. *J Cancer Res Clin Oncol*. 134:715-22.2008.
64. Wada N, Sakemura N, Imoto S, et al. Sentinel node biopsy in primary breast cancer: Radioactive detection and metastatic disease. *Eur J Surg Oncol*. 33(6):691-5.2007.
65. Inagaki M, Yoshikawa E, Imoto S, et al. Smaller regional volumes of brain gray and white matter demonstrated in breast cancer survivors exposed to adjuvant chemotherapy. *Cancer*. 109(1):146-56.2007.
66. Imoto S, Wada N, et al. Serum *c-erbB-2* protein (ErbB-2) is a useful marker for monitoring tumor recurrence of the breast. *Int J Cancer*. 120(2):357-61.2007.
67. Yamauchi C, Hasebe T, Imoto S, et al. Accurate assessment of lymph vessel tumor emboli in invasive ductal carcinoma of the breast according to tumor areas, and their prognostic significance. *Hum Pathol*. 38(2):247-59.2007.
68. 井本 滋: センチネルリンパ節生検における微小転移の意義と実施のタイミング, これからの乳癌診療 pp24-27. 2009.
69. 井本 滋: リンパ節における微小転移の意義, 腫瘍内科 3:691-4.2009.
70. 井本 滋: センチネルリンパ節生検, 外科 71:1168-72.2009.
71. 井本 滋: Sentinel Node Navigation Surgery の進歩 乳癌, 日外会誌 110:78-81.2009.
72. 酒村 智子, 井本 滋 乳癌の予後予測因子, 臨床外科 64:11-4.2009.
73. 井本 滋: センチネルリンパ節生検, これからの乳癌診療 pp31-34. 2008.
74. 長谷部 孝裕, 井本 滋: リンパ節転移癌診断, 病理と臨床 26:1066-72.2008.
75. 井本 滋, 伊東 大樹, 伊美 建太郎, 他: 乳癌治療における SNNS の問題点, 外科 70:396-9.2008.
76. 田中 仁寛, 井本 滋, 和田 徳昭, 他 術前化学療法後のセンチネルリンパ節生検にて術中迅速病理診断が偽陰性となった浸潤性小葉癌の1例, 乳癌の臨床 22(5):409-12.2007.
77. 井本 滋, 伊東 大樹: 手術の tips and pitfalls「乳癌のセンチネルリンパ節生検」, 日外会誌 108(5):281-3.2007.
78. 井本 滋: 補助内分泌療法, 臨床外科 62(7):893-6.2007.
79. 井本 滋: センチネルリンパ節生検による腋窩リンパ節郭清の省略, *Pharma Medica* 24(11):19-21.2007.
- 名川
80. Ishigami H, Kitayama J, Nagawa H, et al. Phase II study of weekly intravenous and intraperitoneal paclitaxel combined with S-1 for advanced gastric cancer with peritoneal metastasis. *Ann Oncol*. 21(1): 67-70, 2010.
81. Kitayama J, Ishigami H, Nagawa H, et al. Weekly intravenous and intraperitoneal paclitaxel combined with S-1 for malignant ascites due to advanced gastric cancer. *Oncology*. 78(1): 40-6. 2010
82. Soma D, Kitayama J, Nagawa H, et al. Different tissue distribution of paclitaxel with intravenous and intraperitoneal administration. *J Surg Res*. 155(1): 142-6. 2009.
83. Ishigami H, Kitayama J, Nagawa H, et al. Phase I pharmacokinetic study of weekly intravenous and intraperitoneal paclitaxel combined with S-1 for advanced gastric cancer. *Oncology*. 76(5): 311-4. 2009.
84. Soma D, Kitayama J, Nagawa H, et al. Intraperitoneal administration of paclitaxel solubilized with poly(2-methacryloxyethyl phosphorylcholine-co n-butyl methacrylate) for peritoneal dissemination of gastric cancer. *Cancer Sci*. 100(10): 1979-85. 2009.
85. Yamada J, Kitayama J, Tsuno NH, Nagawa H, et al. Intra-peritoneal administration of paclitaxel with non-animal stabilized hyaluronic acid as a vehicle--a new strategy against peritoneal dissemination of gastric cancer. *Cancer Letters*. 72(2): 307-15. 2008.
86. Yamada J, Kawai K, Nagawa H et al. Plautol induces apoptosis of gastric cancer cells. *Planta Med*. 73(10): 1068-73. 2007.

87. 石神 浩徳, 北山 丈二, 名川 弘一: 胃癌の化学療法—腹膜播種に対する腹腔内投与を中心に, 外科 71(10): 1033-6.2009.
- 齋藤
88. Hashimoto S, Shiokawa H, Saito N, et al. Development and validation of a modified Fecal Incontinence Quality of Life Scale for postoperative evaluation of Japanese patients with rectal cancer. *J Oncol*. (In press)
89. Ito M, Sugito M, Saito N et al. Influence of learning curve on short-term results after laparoscopic resection for rectal cancer. *Surg Endosc*. 23: 403-8. 2009.
90. Ito M, Saito N, Sugito M, et al. Analysis of Clinical Factors Associated with Anal Function after Intersphincteric Resection for Very Low Rectal Cancer. *Dis Colon Rectum*. 52(1): 64-70. 2009.
91. Koda K, Yasuda H, Saito N, et al. Evaluation of postoperative damage to anal sphincter/levator ani muscles with three-dimensional vector manometry after sphincter-preserving operation for rectal cancer. *J Am Coll Surg*. 208(3): 362-7. 2009.
92. Hirayama A, Kami K, Saito N, et al. Quantitative Metabolome Profiling of Colon and Stomach Cancer Microenvironment by Capillary Electrophoresis Time-of-Flight Mass Spectrometry. *Cancer Res*. 69(11): 4918-25. 2009.
93. Saito N, Sugito M, Ito M, et al. Oncologic outcome of intersphincteric resection for very low rectal cancer. *World J Surg*. 33(8): 1750-6. 2009.
94. Watanabe K, Nagai K, Saito N, et al. Factors influencing survival after complete resection of pulmonary metastases from colorectal cancer. *Br J Surg*. 96(9): 1058-65. 2009.
95. Takashima A, Shimada Y, Saito N, et al. for the Colorectal Cancer Study Group of the Japan Clinical Oncology Group. Current therapeutic strategies for anal squamous cell carcinoma in Japan. *Int J Clin Oncol*. 14: 416-20. 2009.
96. Ito M, Sugito M, Kobayashi A, Saito N, et al. Relationship between multiple numbers of stapler firings during rectal division and anastomotic leakage after laparoscopic rectal resection. *Int J Colorectal Dis*. 23: 703-7. 2008.
97. Tsunoda Y, Ito M, Saito N, et al. Preoperative Diagnosis of Lymph Node Metastases of Colorectal Cancer by FDG-PET/CT. *Jpn J Clin Oncol*. 38(5): 347-53. 2008.
98. Kojima M, Ishii G, Saito N, et al. Immunohistochemical detection of CD133 expression in colorectal cancer: A clinicopathological study. *Cancer Sci*. 99(8): 1578-83. 2008.
99. Kosugi C, Saito N, Murakami K, et al. Positron emission tomography for preoperative staging in patients with locally advanced or metastatic colorectal adenocarcinoma in lymph node metastasis. *Hepato-Gastroenterology*. 55: 398-402. 2008.
100. Kobayashi A, Sugito M, Saito N et al. Predictors of successful salvage surgery in local pelvic recurrences of rectosigmoid colon and rectal cancers. *Surgery Today*. 37: 853-9. 2007.
101. Saito N, Suzuki T, Sugito M, et al. Bladder-Sparing Extended Resection for Locally Advanced Rectal Cancer Involving the Prostate and Seminal Vesicles. *Surgery Today*. 37: 845-52. 2007.
102. Seike K, Koda K, Saito N, et al. Laser Doppler assessment of the influence of division at the root of the inferior mesenteric artery on anastomotic blood flow in rectosigmoid cancer surgery. *Int J Colorectal Dis*. 22: 689-97. 2007.
103. Takahashi S, Nakai K, Saito N, et al. Multiple Resections for Hepatic and Pulmonary Metastases of Colorectal Carcinoma. *Jpn J Clin Oncol*. 37(3): 186-92. 2007.
104. Fujita S, Saito N, Yamada T, et al. Randomized, Multicenter Trial of Antibiotic Prophylaxis in Elective Colorectal Surgery. *Archives of Surgery*. 142: 657-61. 2007.
105. 齋藤 典男、伊藤 雅昭、杉藤 正典 : ISR (Intersphincteric Resection)による経肛門吻合術, *Digestive Surgery NOW No.5 直腸・肛門外科手術、標準手術とステップアップ手術* 96-111.2009.
106. 伊藤 雅昭、齋藤 典男: 肛門管近傍の低位直腸癌に対する内肛門括約筋切除術の治療成績, *大腸疾患 NOW* 133-41.2009.
107. 伊藤 雅昭、齋藤 典男: 超低位直腸癌に対する術前放射線化学療法の功罪, *外科治療* 100: 87-88.2009.
108. 齋藤 典男、鈴木 孝憲、田中 俊之、他: 7.他臓器合併切除、Ⅲ.下部直腸癌の治療、特集 下部直腸癌の診断と治療—最近の進歩, *外科* 2009; 71(2): 169-75.

109. 齋藤 典男、杉藤 正典、他：肛門括約筋部分温存手術による下部直腸癌手術，手術 63(2)：163-8.2009.
110. 齋藤 典男、伊藤 雅昭、杉藤 正典、他：下部直腸進行癌に対する術前照射療法の治療成績，臨床外科 64(3)：317-24.2009.
111. 伊藤 雅昭、齋藤 典男、杉藤 正典、他：腹腔鏡下内肛門括約筋切除術(ISR)，消化器外科 32(7)：1195-207.2009.
112. 伊藤 雅昭、米山 泰生、齋藤 典男：直腸癌に対する腹腔鏡下手術の現状と将来，外科治療 101(2)：179-85.2009.
113. 西澤 祐吏、小林 昭広、齋藤 典男、他：転移性小腸腫瘍，別冊日本臨床 新領域別症候群シリーズ No.12 消化管症候群(第2版)下 116-19. 2009.
114. 齋藤 典男、伊藤 雅昭、杉藤 正典：ISRは一般臨床における術式となりうるか，大腸癌 Frontier 2(3)：45-9.2009.
115. 西澤 雄介、齋藤 典男、杉藤 正典、他：経肛門的結腸-肛門吻合，臨床外科 64(11)臨時増刊号：256-8.2009.
116. 小林 昭広、齋藤 典男、杉藤 正典、他：低位前方切除術における器械吻合のコツ，臨床外科 63(2)：209-13.2008.
117. 齋藤 典男、杉藤 正典、他：6. 大腸がんの治療と成績 5)術前放射線化学療法，大腸がん改訂3版 62-5.2008.
118. 伊藤 雅昭、角田 祥之、齋藤 典男、他：PET/CTが大腸癌手術にもたらす治療選択の可能性-画像と手術の接点，臨床放射線 53(4)：508-16.2008.
119. 皆川 のぞみ、伊藤 雅昭、齋藤 典男、他：恥骨直腸筋およびhiatal ligamentを意識した腹腔鏡下TME，手術 62(4)：495-502.2008.
120. 伊藤 雅昭、齋藤 典男、杉藤 正典、他：直腸癌手術における直腸の切離と吻合-開腹手術と腹腔鏡下手術-，消化器外科 31(8)：1289-98.2008.
121. 西澤 雄介、小林 昭広、齋藤 典男、他：腹膜再発に対する外科治療、II. 各論 2. 治療 a) 外科治療、特集 再発大腸癌の診断・治療-最近の進歩，外科 70(8)：867-70.2008.
122. 小林 昭広、杉藤 正典、齋藤 典男、他：腹腔鏡下(超)低位前方切除における完全気腹下斜めIO吻合，手術 62(10)：1443-8.2008.
123. 小高 雅人、杉藤 正典、齋藤 典男、他：急性骨髄性白血病の寛解導入療法による骨髄抑制期に好中球減少性腸炎および急性虫垂炎を発症した1例，日消外会誌 40(1)：124-8.2007.
124. 齋藤 典男、杉藤 正典、伊藤 雅昭、他：超低位直腸癌における肛門括約筋部分温存手術の適応と方法，消化器外科 30(9)：1335-43.2007.
125. 伊藤 雅昭、角田 祥之、齋藤 典男：大腸がんにおけるPET/CTの有用性，Mebio 24(8)：70-8.2007.
- 内田
126. Niimi R, Matsumine A, Uchida A, et al. Epithelioid hemangioendothelioma after radiotherapy for congenital hemangioma: a case report. Med Oncol. 27:130-3.2010.
127. Niimi R, Matsumine A, Uchida A, et al. Expression of hDlg as a biomarker of outcome in malignant fibrous histiocytomas. Oncol Rep. 23: 631-8. 2010.
128. Nakamura T, Matsumine A, Uchida A, et al. Lung radiofrequency ablation in patients with pulmonary metastases from musculoskeletal sarcomas: An initial experience. Cancer. 115(16): 3774-81. 2009.
129. Nakamura T, Matsumine A, Uchida A, et al. Malignant melanoma with a rhabdoid phenotype exhibiting numerous solid tumor masses; A case report. Oncol Rep. 21(4): 887-91. 2009.
130. Matsumine A, Kusuzaki K, Uchida A, et al. Differentiation between neurofibromas and malignant peripheral nerve sheath tumors in neurofibromatosis 1 evaluated by MRI. J Cancer Res Clin Oncol. 135(7): 891-900. 2009.
131. Araki K, Wakabayashi H, Uchida A, et al. Decorin suppresses bone metastasis in a breast cancer cell line. Oncology. 77: 92-9. 2009.
132. Naito Y, Akeda K, Uchida A, et al. Lumbar metastasis of choriocarcinoma. Spine. 34: E538-43. 2009.
133. Nakamura T, Matsumine A, Uchida A, et al. Management of small pulmonary nodules in patients with sarcoma. Clin Exp Metastasis. 26: 713-8. 2009.
134. Akeda K, Nishimura A, Uchida A, et al. Three-dimensional alginate spheroid culture system of murine osteosarcoma. Oncol Rep. 22: 997-1003. 2009.
135. Nakamura T, Kusuzaki K, Uchida A, et al. A new limb salvage surgery in cases of high-grade soft tissue sarcoma using photodynamic surgery, followed by photo- and radiodynamic therapy

- with acridine orange. *J Surg Oncol.* 97: 523-8. 2008.
136. Hori K, Sudo A, Uchida A, et al. Asymptomatic disseminated carcinomatosis of bone marrow presenting as hyperphosphatasia: report of a case. *Acta Gastroenterol Belg.* 71:271-4.2008.
  137. Shintani K, Matsumine A, Uchida A, et al. Decorin suppresses lung metastases of murine osteosarcoma. *Oncol Rep.* 19: 1533-9. 2008.
  138. Nakamura T, Kusuzaki K, Uchida A, et al. Foreign-body granulomas in the trunk and extremities may simulate malignant soft-tissue tumors: report of three cases. *Acta Radiol.* 49: 80-3. 2008.
  139. Nakamura T, Kusuzaki K, Uchida A, et al. Histiocytic osteolysis secondary to hyperbilirubinaemia: a case report. *J Orthop Surg (Hong Kong).* 16: 263-6. 2008.
  140. Matsubara T, Kusuzaki K, Uchida A, et al. Methylene blue in place of acridine orange as a photosensitizer in photodynamic therapy of osteosarcoma. *In Vivo.* 22: 297-304. 2008.
  141. Niimi R, Matsumine A, Uchida A, et al. Primary osteosarcoma of the lung: a case report and review of the literature. *Med Oncol.* 25: 251-5. 2008.
  142. Takenaka S, Ueda T, Uchida A, et al. Prognostic implication of SYT-SSX fusion type in synovial sarcoma: a multi-institutional retrospective analysis in Japan. *Oncol Rep.* 19: 467-76. 2008.
  143. Niimi R, Matsumine A, Uchida A, et al. Usefulness of limb salvage surgery for bone and soft tissue sarcomas of the distal lower leg. *J Cancer Res Clin Oncol.* 134: 1087-95. 2008.
  144. Okuyama N, Matsumine A, Uchida A, et al. Matrix metalloproteinase-1 is a crucial bone metastasis factor in a human breast cancer-derived highly invasive cell line. *Oncol Rep.* 20: 1497-504. 2008.
  145. Matsubara T, Kusuzaki K, Uchida A, et al. A new therapeutic modality involving acridine orange excitation by photon energy used during reduction surgery for rhabdomyosarcomas. *Oncol Rep.* 21: 89-94. 2008.
  146. Niimi R, Uchida A, et al. Primary osteosarcoma of the lung: a case report and review of the literature. *Med Oncol.* 25(2): 251-5. 2008.
  147. Hoki Y, Uchida A, et al. iNOS-dependent DNA damage in patients with malignant fibrous histiocytoma in relation to prognosis. *Cancer sci.* 98: 163-168. 2007.
  148. Kusuzaki K, Uchida A, et al. Acridine orange could be an innovative anticancer agent inder photon energy. *In vivo.* 21: 205-14.2007.
  149. Maeda M, Matsumine A, Uchida A, et al. Soft-Tissue Tumors Evaluated by Line-Scan Diffusion-Weighted Imaging: Influence of Myxoid Matrix on the Apparent Diffusion Coefficient. *J Magnetic Resonance Imaging.* 25: 1199-204. 2007.
  150. Matsumine A, Uchida A, et al. Novel hyperthermia for metastatic bone tumors with magnetic materials by generating an alternating electromagnetic field. *Clin Exp Matastasis.* 24: 191-200. 2007.
  151. Asanuma K, Uchida A, et al. Protein C inhibitor inhibits breast cancer cell growth, metastasis and angiogenesis independently of its protease inhibitory activity. *Int J Cancer.* 121: 955-65. 2007.
  152. Miyazaki S, Uchida A, et al. Methylthioadenosine phosphorylase deficiency in Japanese osteosarcoma patients. *Int J Oncol.* 31: 1069-76. 2007.
  153. Hoki Y, Uchida A, et al. 8-Nitroguanine as a potential biomarker for progression of malignant fibrous histiocytoma, a model of inflammation-related cancer. *Oncol Rep.* 18: 1165-69. 2007.
  154. Satonaka H, Uchida A, et al. Flash Wave Light Strongly Enhanced the Cytocidal Effect of Photodynamic Therapy with Acridine Orange on a Mouse Osteosarcoma Cell Line. *Anticancer Research.* 27: 3339-44. 2007.
  155. Kato H, Uchida A, et al. Lage-scale gene expression profiles, differentially represented in osteoarthritic synovium of the knee joint using cDNA microarray technology. *Biomarkers.* 12(4): 384-402. 2007.
  156. 松峯 昭彦、内田 淳正: 骨軟部腫瘍, 入門腫瘍内科学 514-217.2009.
  157. 松峯 昭彦、中村 知樹、内田 淳正: 【骨軟部腫瘍診断のピットフォールー誤診とその要因一】 骨・軟部腫瘍の生検診断のピットフォール, 関節外科 28: 75-83.2009.
  158. 中村 知樹、松峯 昭彦、内田 淳正、他: 急速な臨床経過を呈した多発性悪性黒色腫の1例, 整形外科 60(12): 1277-80.2009.
  159. 中村 知樹、松峯 昭彦、内田 淳正、他: 内転筋群発生の軟部肉腫における治療成績, 整形外科 60(9): 951-55.2009.

160. 濱口 貴彦、松峯 昭彦、内田 淳正、他: 当院における小児骨肉腫の治療成績, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 52: 837-38.2009.
161. 松峯 昭彦、中村 知樹、内田 淳正、他: 骨・軟部腫瘍診断、治療効果判定におけるタリウムシンチグラフィの有用性, 関節外科 27:197-204.2008.
162. 松峯 昭彦、楠崎 克之、内田 淳正、他: Current Organ Topics 骨軟部腫瘍 悪性骨軟部腫瘍における Minimally Invasive Surgery の話題, 癌と化学療法 35: 420-3. 2008.
163. 村田 耕一郎、中村 知樹、内田 淳正、他: 非定型的な画像所見を示した骨肉腫の2例, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 51: 79-80. 2008.
164. 濱口 貴彦、松峯 昭彦、内田 淳正、他: 足関節に発生した骨形成を伴う色素性絨毛結節性滑膜炎の1例, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 51: 551-2. 2008.
165. 今西 隆夫、松峯 昭彦、内田 淳正: Plexiform schwannoma の2例, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 51: 853-4. 2008.
166. 中村 知樹、松原 孝夫、内田 淳正、他: 上肢悪性腫瘍に対する手術の成績と問題点 上肢悪性腫瘍に対する治療の工夫, 別冊整形外科 54: 226-30. 2008.
- 中塚
167. Okazaki M, Asato H, Nakatsuka T, et al. Analysis of salvage treatments following the failure of free flap transfer caused by vascular thrombosis in reconstruction for head and neck cancer. *Plast Reconstr Surg.* 119(4): 1223-32. 2007.
168. 中塚貴志: 頭頸部領域 移植組織の壊死, *JOHNS* 23(8): 1135-7. 2007.
- 佐々木
169. Itoh H, Iwasaka M, Hanaoka T, Sasaki H, et al. Urinary Phthalate monoesters and endometriosis in infertile Japanese women. *Science of the Total Environment.* 408: 37-42. 2009.
170. Tada H, Teramukai S, Sasaki H, et al. Risk factors lower limb lymphedema after lymph node dissection in patients with ovarian and uterine carcinoma. *BMC Cancer.* 9;47: 1-17. 2009.
171. Itoh H, Iwasaki M, Nakajuma Y, Sasaki H, et al. A case-control study of the association between urinary cadmium concentration and endometriosis in infertile Japanese women. *Science of the Total Environment.* 402: 171-5. 2008.
172. Tanaka T, Ohki N, Kojima A, Sasaki H, et al. Radiotherapy negates the effect of retroperitoneal nonclosure for prevention of lymphedema of the legs following pelvic lymphadenectomy for gynecological malignancies: an analysis from a questionnaire survey. *Int Gynecol Cancer.* 17: 460-4. 2007.
173. Ushijima K, Yahata H, Sasaki H, et al. Multicenter Phase II Study of Fertility-Sparing Treatment With Medroxyprogesterone Acetate for Endometrial Carcinoma and Atypical Hyperplasia in Young Women. *JOURNAL OF CLINICAL ONCOLOGY.* 25;19: 2789-02. 2007.
174. Takakura S, Saito M, Sasaki H, et al. Irinotecan Hydrochloride (CPT-11) and Cisplatin as First-Line Chemotherapy After Initial Surgery for Ovarian Clear Cell Adenocarcinoma. *Int Surg.* 92: 202-8. 2007.
175. Takao M, Okamoto A, Sasaki H, et al. Increased Synthesis of indoleamine-2, 3-dioxygenase protein is positively associated with impaired survival in patients with serous-type, but not with other types of, ovarian cancer. *ONCOLOGY REPORTS.* 17: 1333-9. 2007.
176. Itoh H, Iwasaki M, Sasaki H, et al. Urinary Bisphenol-A Concentration in Infertile Japanese Women and Its Association with Endometriosis: A Cross-Sectional Study. *Environmental Health and Preventive Medicine.* 12(6): 258-64. 2007.
177. 佐々木 寛、佐々木 徹、多田 春江、他: 婦人科癌術後の下肢リンパ浮腫の危険因子と後腹膜大腿ソケイブ部でのリンパ管静脈吻合術の有効性, マイクロスージャリー学会会誌 (In press)
178. 佐々木 寛: 子宮内膜癌検診における子宮内膜増殖症の意義と診断, 日本臨床細胞学会広島県支部会誌 30: 1-7. 2009.
179. 佐々木 寛、飯田 泰志、武石 明精: リンパ浮腫、リンパ嚢胞を予防する術式と対応, 臨床婦人科産科 63(12): 1553-6. 2009.
180. 佐々木 寛: 子宮内膜増殖症の発生過程と診断, *Medical Technology* 37(10): 1073-80. 2009.
181. 石塚 康夫、佐々木 寛: 婦人科がんの細胞診断, 産科と婦人科 76(8): 921-9. 2009.
182. 佐々木 寛: 婦人科がん手術後の下肢リンパ浮腫の予防, 産科と婦人科 76(1): 94-6. 2009.

183. 比留間 理枝子、上出 泰山、佐々木 寛、他：子宮頸癌におけるIrinotecan HydrochlorideとNedaplatin 併用化学療法，癌と化学療法 35(4): 607-10.2008.
184. 小田 瑞恵、中島 弘一、佐々木 寛、他：子宮体部 1)子宮内膜細胞診—吸引器具の実際，産婦人科治療 96(5): 940-3.2008.
185. 田中 尚武、平田 哲士、鈴木 博、佐々木 寛：子宮体部 3)ソフトサイト ソフトサイトのより採取された子宮内膜癌細胞の特徴所見，産婦人科治療 97(1): 80-3.2008.
186. 福田 貴則、佐々木 寛：卵巣癌の腹腔鏡下手術，産婦人科の実際 57(11): 1768-71.2008.
187. 福田 貴則、江澤 正浩、佐々木 寛、他：当院における回転運動を使用した腹腔鏡下卵巣嚢腫摘出術体腔内法について，日産婦千葉会誌 1(1): 51-3.2008.
188. 佐々木 寛、高野 浩邦、篠崎 英雄、石塚 康夫：婦人科領域の細胞診断学における採取器具の診断上の留意点，産婦人科治療 96(1): 94-9.2008.
189. 佐々木 寛、石塚 康夫：卵巣がんの術前診断—卵巣癌の治療戦略；初回腫瘍手術所の有効性と術中迅速病理診断の限界，産婦人科の世界 59(8): 87-93.2007.
- 萩原
190. Kuriu Y, Yamagishi H, Hagiwara A, et al. Regeneration of peritoneum using amniotic membrane to prevent postoperative adhesions. Hepato-Gastroenterology. 56: 1064-8. 2009.
191. Nakase Y, Hagiwara A, et al. Intrathoracic esophageal replacement by in situ tissue-engineered esophagus. J. of thoracic and cardiovascular surgery. 136: 850-9. 2008.
192. 荒井先生
193. Kobayashi T, Arai Y, Takeuchi Y, et al. Phase I/II clinical study of percutaneous vertebroplasty (PVP) as palliation for painful malignant vertebral compression fractures (PMVCF): JIVROSG-0202. Ann Oncol. 20: 1943-7. 2009.
194. Tokue H, Tsushima Y, Arai Y, et al. Jejuno gastric intussusception: life-threatening complication occurring 55 years after gastrojejunostomy. Intern Med. 48: 1657-60. 2009.
195. Sofue K, Tateishi U, Arai Y, et al. Role of carbon-11 choline PET/CT in the management of uterine carcinoma: initial experience. Ann Nucl Med. 23: 235-43. 2009.
196. Hirokawa T, Sawai H, Arai Y, et al. Middle-colic artery aneurysm associated with segmental arterialmediolysis, successfully managed by transcatheter arterial embolization: report of a case. Surg Today. 39: 144-7. 2009.
197. Miyake M, Tateishi U, Arai Y, et al. Computed tomography and magnetic resonance imaging findings of soft tissue perineurioma. Radiation Medicine. 26: 368-71. 2008.
198. Morimoto T, Inuma G, Arai Y, et al. Computer-aided detection in computed tomography colonography: current status and problems with detection of early colorectal cancer. Radiation Medicine. 26: 261-9. 2008.
199. Satake M, Uchida H, Arai Y, et al. Transcatheter arterial chemoembolization (TACE) with lipiodol to treat hepatocellular carcinoma: survey results from the TACE study group of Japan. Journal of Cardiovascular and Interventional Radiology. 31: 756-61. 2008.
200. Iguchi T, Arai Y, Inaba Y, et al. Hepatic arterial infusion chemotherapy through a port-catheter system as preoperative initial therapy in patients with advanced liver dysfunction due to synchronous and unresectable liver metastases from colorectal cancer. Cardiovasc Intervent Radiol. 31: 86-90. 2008.
201. Shimada K, Sakamoto Y, Arai Y, et al. Analysis of prognostic factors affecting survival after initial recurrence and treatment efficacy for recurrence in patients undergoing potentially curative hepatectomy for hepatocellular carcinoma. Anna Surg Oncol. 14: 2237-47. 2007.
202. Arai Y, Takeuchi Y, Inaba Y, et al. Percutaneous Catheter Placement for Hepatic Arterial Infusion Chemotherapy. Techniques in Vasc and Intervent Radiol. 1: 30-7. 2007.
203. Shimamoto H, Inaba Y, Arai Y, et al. Chest wall dissemination of nocardiosis after percutaneous transthoracic needle biopsy. Cardiovasc Intervent Radiol. 30: 797-9. 2007.
204. Sakamoto N, Monzawa S, Arai Y, et al. Acute tumor lysis syndrome caused by transcatheter oily chemoembolization in a patient with a large hepatocellular carcinoma. Cardiovasc Intervent Radiol. 30: 508-11. 2007.
205. 荒井 保明：Interventional radiology, 新臨床腫瘍学改訂第2版 246-9.2009.



206. 渡辺 裕一、楠本 昌彦、荒井 保明: RECIST guidelines, 日本臨床 67 (1):438-46.2009.
207. 飯沼 元、内田 香織、荒井 保明、他: CT colonography 大腸癌スクリーニングへの応用を目指して, 映像情報 41(7):113-20.2009.
208. 飯沼 元、内田 香織、荒井 保明、他: 消化管の画像診断: 最近のトピックスーマルチスライスCTの進歩とCT colonography, 映像情報 41(1):54-9.2009.
209. 女屋 博昭、尾島 英知、荒井 保明: 多血性(古典的)肝細胞癌の画像と病理, 画像診断 29(6):601-13.2009.
210. 荒井 保明: 肝以外の領域におけるラジオ波凝固療法の国内臨床試験の現況, 医学のあゆみ 231(3):239-242.2009.
211. 荒井 保明: IVRのエビデンスの現況, 断層映像研究会雑誌 36(2):90-95.2009.
212. 曾根美雪、江原茂、荒井保明、他: IVRのエビデンスを創るための研究デザイン, 断層映像研究会雑誌 36(2):96-104.2009.
213. 渡辺 裕一、荒井 保明: RECIST guideline version 1.1 概論, 断層映像研究会雑誌 36(1):17-22.2009.
214. 飯沼 元、鈴木 雅之、荒井 保明、他: FPDシステムの臨床応用の歩みとこれからの方向性, インナービジョン 22(2):5-8.2007.
215. 荒井 保明: 転移性肝癌に対する動注化学療法法の現況, 成人病と生活習慣病 37(6):668-93.2007.
216. 荒井 保明: 序 緩和医療で活用すべき Interventional Radiology(IVR), 緩和医療学 9(4):1-2.2007.
217. 荒井 保明: 嘔気・嘔吐、消化管閉塞に対する interventional Radiology(IVR), 緩和ケア 17(6):497-501.2007.
218. 竹内 義人、高橋 正秀、荒井 保明、他: 大静脈症候群に対する IVR, 緩和医療学 9(4):8-19.2007.
- 土岐
219. Yamamoto K, Takiguchi S, Doki Y, et al. Randomized phase II study of clinical effects of ghrelin after esophagectomy with gastric tube reconstruction. Surgery. (In press)
220. Makino T, Doki Y, et al. he utility of pre-operative peritoneal lavage examination in serosa-invading gastric cancer patients. Surgery. (In press)
221. Adachi S, Takiguchi S, Doki Y, et al. Effects of ghrelin administration after total gastrectomy: a prospective, randomized, placebo-controlled phase II study. Gastroenterology. 138(4): 1312-20. 2010.
222. Takeno A, Takemasa I, Doki Y, et al. Gene expression profile prospectively predicts peritoneal relapse after curative surgery of gastric cancer. Ann Surg Oncol. 17(4): 1033-42. 2010.
223. Makino T, Yamasaki M, Doki Y, et al. Cytokeratins 18 and 8 are poor prognostic markers in patients with squamous cell carcinoma of the oesophagus. Br J Cancer. 101(8): 1298-306. 2009.
224. Miyata H, Yamasaki M, Doki Y, et al. Salvage esophagectomy after definitive chemoradiotherapy for thoracic esophageal cancer. J Surg Oncol. 1;100(6): 442-6. 2009.
225. Makino T, Yamasaki M, Doki Y, et al. Dickkopf-1 expression as a marker for predicting clinical outcome in esophageal squamous cell carcinoma. Ann Surg Oncol. 16(7): 2058-64. 2009.
226. Yoshioka A, Miyata H, Doki Y, et al. The activation of Akt during preoperative chemotherapy for esophageal cancer correlates with poor prognosis. Oncol Rep. 19: 1099-107. 2008.
227. Miyata H, Doki Y, Yasuda T, et al. Evaluation of clinical significance of 18F-fluorodeoxyglucose positron emission tomography in superficial squamous cell carcinomas of the thoracic esophagus. Diseases of the Esophagus. 21: 144-50. 2008.
228. Higuchi I, Yasuda T, Doki Y, et al. Lack of fludeoxyglucose F 18 uptake in posttreatment positron emission tomography as a significant predictor of survival after subsequent surgery in multimodality treatment for patients with locally advanced esophageal squamous cell carcinoma. J Thorac Cardiovasc Surg. 136(1): 205-12. 2008.
229. Makino T, Doki Y, Miyata H, et al. Use of 18F-fluorodeoxyglucose -positron emission tomography to evaluate responses to neo-adjuvant chemotherapy for primary tumor and lymph node metastasis in esophageal squamous cell carcinoma. Surgery. 144(5): 793-802. 2008.
230. Akita H, Doki Y, Yano M, et al. Effects of neoadjuvant chemotherapy on primary tumor and lymph node metastasis in esophageal squamous cell carcinoma: additive association

with prognosis. *Dis Esophagus*. 22(4):291-7. 2008.

231. Matsuyama J, Doki Y, Yasuda T, et al. The effect of neoadjuvant chemotherapy on lymph node micrometastases in squamous cell carcinomas of the thoracic esophagus. *Surgery*. 141(5): 570-80. 2007.
232. Makari M, Yasuda T, Doki Y, et al. Correlation between tumor blood flow assessed by perfusion CT and effect of neoadjuvant therapy in advanced esophageal cancers. *J Surg Oncol*. 96(3): 220-9. 2007.
233. Doki Y, Yasuda T, Miyata H, et al. Salvage Lymphadenectomy of the Right Recurrent Nerve Node with Tracheal Involvement after Definitive Chemo-radiation Therapy for Esophageal Squamous Cell Carcinoma: Report of Two Cases. *Surg Today*. 37(7): 590-5. 2007.
234. Yamasaki M, Takemasa I, Doki Y, et al. The gene expression profile represents the molecular nature of liver metastasis in colorectal cancer. *Int J Oncol*. 30(1): 129-38. 2007.

#### 古瀬

235. Okusaka T, Ito Y, Furuse J et al. Current status of chemoradiotherapy for locally advanced pancreatic cancer in Japan. *Int J Clin Oncol*. 13: 127-31. 2008.
236. Okusaka T, Funakoshi A, Furuse J, et al. A late phase II study of S-1 for metastatic pancreatic cancer. *Cancer Chemother Pharmacol*. 61(4): 615-21. 2008.
237. Morizane C, Okusaka T, Furuse J, et al. A phase II study of S-1 in gemcitabine-refractory metastatic pancreatic cancer. *Cancer Chemother Pharmacol*. 63(2): 313-9. 2008.
238. Furuse J, Ishii H, Kawashima M, et al. A phase I study of hypofractionated radiotherapy followed by systemic chemotherapy with full-dose gemcitabine in patients with unresectable locally advanced pancreatic cancer. *Hepatogastroenterology*. 54: 1575-8. 2007.
239. Ikeda M, Okusaka T, Ito Y, Furuse J, et al. A phase I trial of S-1 with concurrent radiotherapy for locally advanced pancreatic cancer. *Br J Cancer*. 96: 1650-5. 2007.
240. Okusaka T, Funakoshi A, Furuse J, et al. A late Phase II study of S-1 for metastatic pancreatic cancer. *Cancer Chemother Pharmacol*. 61: 615-21. 2008.
241. Nakachi K, Furuse J, Ishii H, et al. Prognostic factors in patients with gemcitabine refractory

pancreatic cancer. *Jpn J Clin Oncol*. 37: 114-20. 2007.

242. Sugiyama E, Kaniwa N, Kim SR, Furuse J, et al. Pharmacokinetics of gemcitabine in Japanese cancer patients: the impact of a cytidine deaminase polymorphism. *J Clin Oncol*. 25: 32-42. 2007.
243. Inagaki M, Yoshikawa E, Furuse J, et al. Regional cerebral glucose metabolism in patients with secondary depressive episodes after fatal pancreatic cancer diagnosis. *J Affect Disord*. 99: 231-6. 2007.
244. 古瀬 純司: 分子標的薬の現状と展望—EGFR を標的として, *アークメディア* 58(3): 345-51. 2009.
245. 古瀬 純司: 膵癌診療最前線 新たな抗癌薬により長期生存を目指す. 膵癌に対する化学療法. 外来化学療法の実際と工夫, *内科* 102(4): 706-11. 2008.
246. 古瀬 純司: 膵がんの診療と予後を考える 化学療法の適応と実際, *臨床腫瘍プラクティス* 4(2): 139-44. 2008.
247. 古瀬 純司: がん薬物療法学—基礎・臨床研究のアップデート— IV. 作用機序からみた抗悪性腫瘍薬の分類 殺細胞性抗悪性腫瘍薬代謝拮抗薬(フッ化ピリミジン・非フッ化ピリミジン), *日本臨床* 67suppl1: 224-30. 2009.

#### 池田

248. Ishii H, Furuse J, Ikeda M, et al. Phase II Study of Gemcitabine Chemotherapy Alone for Locally Advanced Pancreatic Carcinoma: JCOG0506. *Jpn J Clin Oncol*. (in press)
249. Iwasa S, Morizane C, Ikeda M, et al. Cisplatin and Etoposide as First-line Chemotherapy for Poorly Differentiated Neuroendocrine Carcinoma of the Hepatobiliary Tract and Pancreas. *Jpn J Clin Oncol*. (in press)
250. Nakachi K, Furuse J, Ikeda M, et al. A phase II study of induction chemotherapy with gemcitabine plus S-1 followed by chemoradiotherapy for locally advanced pancreatic cancer. *Cancer Chemother Pharmacol*. (in press)
251. Soeda A, Morita-Hoshi Y, Ikeda M, et al. Regular Dose of Gemcitabine Induces an Increase in CD14+ Monocytes and CD11c+ Dendritic Cells in Patients with Advanced Pancreatic Cancer. *Jpn J Clin Oncol*. 39(12): 797-806. 2009.
252. Hashimoto K, Ueno H, Ikeda M, et al. Do recurrent and metastatic pancreatic cancer patients have the same outcomes with

- gemcitabine treatment? *Oncology*. 77(3-4): 217-23. 2009.
253. Seki Y, Okusaka T, Ikeda M, et al. Four Cases of Pancreatic Acinar Cell Carcinoma Treated with Gemcitabine or S-1 as a Single Agent. *Jpn J Clin Oncol*. 39(11): 751-5. 2009.
254. Morizane C, Okusaka T, Ikeda M, et al. A phase II study of S-1 in gemcitabine-refractory metastatic pancreatic cancer. *Cancer Chemother Pharmacol*. 63(2): 313-9. 2009.
255. Ueno H, Kaniwa N, Ikeda M, et al. Homozygous CDA\*3 is a major cause of life-threatening toxicities in gemcitabine-treated Japanese cancer patients. *Br J Cancer*. 100(6): 870-3. 2009.
256. 清水 怜、池田 公史、仲地 耕平、他:S-1承認により進行膵癌の治療はどう変わったか?, *消化器科* 48(2):196-201.2009.
257. 仲地 耕平、池田 公史、光永 修一、他:分子標的薬, *胆と膵* 30(10):1326-28.2009.
258. 仲地 耕平、池田 公史、光永 修一、他:膵癌に対する分子標的治療の現状, *肝胆膵* 59(5):1039-43.2009.
- 武藤
259. Hayashi T, Muto M, et al. Usefulness of Narrow Band Imaging for detecting the primary tumor site in patients with primary unknown cervical lymph node metastasis. *Jpn J Clin Oncol*. (in press)
260. Muto M, Minashi K, et al. Early detection of superficial squamous cell carcinoma in the head and neck region and esophagus by narrow band imaging: a multicenter randomized controlled trial. *J Clin Oncol*. 28(9): 1566-72. 2010.
261. Katada C, Muto M, et al. Narrow band imaging for detecting superficial squamous cell carcinoma of the head neck in patients with esophageal squamous cell carcinoma. *Endoscopy*. 42(3): 185-90. 2010.
262. Ezoe Y, Muto M, et al. Magnifying narrow-band imaging versus magnifying white-light imaging for differential diagnosis of gastric small depressed lesions: a prospective Study. *Gastrointest Endosc*. 71(3): 477-84. 2010.
263. Kurokawa Y, Muto M, et al. A phase II trial of combined treatment of endoscopic mucosal resection and chemoradiotherapy for clinical stage I esophageal carcinoma: Japan Clinical Oncology Group Study JCOG0508. *Jpn J Clin Oncol*. 39(10): 686-9. 2009.
264. Muto M, Horimatsu T, et al. Improving visualization techniques by narrow band imaging and magnification endoscopy. *J Gastroenterol Hepatol*. 24(8): 1333-46. 2009.
265. Kaltenbach T, Muto M, et al. Teleteaching endoscopy: the feasibility of real-time, uncompressed video transmission by using advanced-network technologies. *Gastrointest Endosco*. 70(5): 1013-7. 2009.
266. Yokoyama A, Muto M, et al. Health risk appraisal models for mass screening for esophageal and pharyngeal cancer: an endoscopic follow-up study of cancer-free Japanese men. *Cancer Epidemiol Biomarkers Prev*. 18(2): 651-5. 2009.
267. Ugumori T, Muto M, et al. Prospective study of early detection of pharyngeal superficial carcinoma with the narrowband imaging laryngoscope. *Head Neck*. 31(2): 189-94. 2009.
268. Muto M, et al. Narrow Band Imaging of the Gastrointestinal Tract. *J Gastroenterol*. 44(1): 13-25. 2009.
269. Muto M. Endoscopic diagnosis and treatment of superficial cancer in the oropharynx and hypopharynx. New challenges in gastrointestinal endoscopy. 67-76. 2008.
270. Atsushi K, Muto M, et al. Narrow band imaging with magnifying colonoscopy as a diagnostic tool for predicting the histology of early colorectal neoplasia. *Alimentary Pharmacol & Therapeutics*. 27(12): 1269-74. 2008.
271. Fuse N, Muto M, et al. safety of irinotecan and infusional fluorouracil/leucovorin (FOLFIRI) in Japan: a retrospective review of 48 patients with metastatic colorectal cancer. *Int J Clin Oncology*. 13: 144-9. 2008.
272. Oyama T, Muto M, et al. Expression of cytochrome P450 in non-small cell lung cancer. *Frontiers in Bioscience*. 13: 5787-93. 2008.
273. Yano T, Muto M, et al. Long-term results of salvage endoscopic mucosal resection in patients with local failure after definitive chemoradiotherapy for esophageal squamous cell carcinoma. *Endoscopy*. 40: 717-21. 2008.
274. Onozawa M, Muto M, et al. Elective nodal irradiation (ENI) in definitive chemoradiotherapy (CRT) for squamous cell carcinoma of the thoracic esophagus. *Radiotherapy and Oncology*. 1-4. 2008.
275. Yokoyama T, Muto M, et al. Health risk appraisal models for mass screening of esophageal cancer in Japanese men. *Cancer*

- Epidem Biomark & Prev. 17(10): 2846-54. 2008.
276. Minashi K, Muto M, et al. Nonsurgical treatment of superficial esophageal squamous cell carcinoma. *Esophagus*. 4: 159-64. 2007.
277. Takeuchi S, Ohtsu A, Muto M, et al. A retrospective study of definitive chemoradiotherapy for elderly patients with esophageal cancer. *American Journal of Clinical Oncology*. 30(6): 607-11. 2007.
278. Minegishi Y, Tsukino H, Muto M, et al. Susceptibility to lung cancer and genetic polymorphisms in the alcohol metabolite-related enzymes alcohol dehydrogenase 3, aldehyde dehydrogenase 2, and cytochrome p450 2e1 in the Japanese population. *American Cancer Society*. 110: 353-62. 2007.
279. Fuse N, Doi T, Muto M, et al. Feasibility of oxaliplatin and infusional fluorouracil/leucovorin (FOLFOX4) for Japanese patients with unresectable metastatic colorectal cancer. *Japanese Journal Clinical Oncology*. 37(6): 434-9. 2007.
280. Muto M, Fujishiro M, Sato Y, et al. Multicenter study design of the ex vivo evaluation of endocytoscopy in esophageal squamous cell carcinoma. *Digestive Endoscopy*. 19: S153-5. 2007.
281. Katada C, Muto M, Momma M, et al. Clinical outcome after endoscopic mucosal resection for esophageal squamous cell carcinoma invading the muscularis mucosa—a multicenter retrospective cohort study. *Endoscopy*. 39(9): 779-83. 2007.
282. Fujishiro M, Takubo K, Muto M, et al. Potential and present limitation of endocytoscopy in the diagnosis of esophageal squamous-cell carcinoma: A multicenter ex vivo pilot study. *Gastrointest Endosc*. 66(3): 551-5. 2007.
283. Asakage T, Yokoyama A, Muto M, et al. Genetic polymorphisms of alcohol and aldehyde dehydrogenases, and drinking, smoking and diet in Japanese men with oral and pharyngeal squamous cell carcinoma. *Carcinogenesis*. 28: 865-74. 2007.
284. Oyama T, Isse T, Muto M, et al. Susceptibility to inhalation toxicity of acetaldehyde in Aldh2 knockout mice. *Frontiers in Bioscience*. 12: 1927-34. 2007.
285. Hosokawa A, Sugiyama T, Muto M, et al. Long-term outcomes of patients with metastatic gastric cancer after initial S-1 monotherapy. *J Gastroenterol*. 42(7): 533-8. 2007.
286. 武藤 学、三梨 桂子、大津 敦、他：【消化管癌の化学・放射線療法の効果判定と問題点】食道癌に対する化学放射線療法の治療前有効性評価, 胃と腸 44(12):1901-7.2009.
- H. 知的財産権の出願・登録情報（予定を含む）**
1. 特許取得
1. 江角浩安 抗腫瘍剤  
[特開 2007-31412]
  2. 江角浩安 ARK5  
出願番号[特願 2002-247761]
  3. 江角浩安 抗がん剤及び抗癌用薬理組成物  
出願番号[特願 2003-004814]
  4. 江角浩安 抗ナイセリア菌組成物  
出願番号[特願 2002-014242]
  5. 江角浩安 アルクチゲニン高含有ゴボウシエキス及びその製造方法  
出願番号[2010-505497]
  6. 萩原明郎（新規の手術用シール材の開発として特許を申請する予定ですが申請前のため公知の事実になることを避ける必要があります、そのため詳細は記載できません）
  7. 荒井保明 経頸静脈経肝の腹腔—静脈シャント造設術に用いる T T P V S カテーテルについて、製造企業より日、独、伊、仏、米に申請中。
2. 実用新案登録  
なし
3. その他  
なし